建設業しんこう
建設産業の今を伝え
未来を考える
11
Nov.2026
No.583



もふもふ建設隊
ワンタ



特　集

建設キャリアアップシステムの進化と可能性

今月のCCUS

スマホアプリ「建キャリ」
対応言語が拡大



法定外労災補償制度　諸費用補償（企業防衛）

建設共済保険

さらに新しくなった!
建設共済保険制度の
10のポイント！

「建設共済保険」の他にも、次のような事業を行っています。

育英奨学事業

被災者（死亡および身体障害・傷病3級以上）の子供に対して、要保育期間および小学校から大学までの在学期間中、返済不要の奨学金を継続して給付。

労働安全衛生推進事業

① 安全衛生用品の頒布

② 女性専用トイレ・更衣室導入費用に対する助成

③ 安全衛生推進者表彰　等

https://www.kyousaidan.or.jp/

建設共済保険　検索

詳しくはホームページをご覧下さい

正確な掛金の試算や資料請求はこちらまで

公益財団法人 建設業福祉共済団
〒105-0001　東京都港区虎ノ門1-2-8　虎ノ門琴平タワー11階

■取扱機関：各都道府県建設業協会

11 Nov.2026 No.583



建設業しんこう

建設産業の今を伝え
未来を考える

編集・発行
一般財団法人 建設業振興基金
〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-2-12
虎ノ門4丁目MTビル2号館
TEL：03-5473-4584
FAX：03-5473-1594
URL：https://www.kensetsu-kikin.or.jp/

CONTENTS

特集
建設キャリアアップシステムの進化と可能性 02
- CCUSの活用状況について
- 個社レベルでのCCUS利用例の紹介
- まとめ

FOCUS
工業高校紹介
千葉県立京葉工業高等学校 08
- インタビュー：成毛 ちひろ 先生

PRESCRIPTION
建設経済の動向 10
- どうする内水氾濫？
  従来型のハード対策だけでは不十分

連載 ## 建設業バックオフィスDX・AI最前線 11
- 【第6回】
  完工後に赤字に気づく会社と、
  工期中に手を打てる会社

連載 ## かわいい土木【第66回】 12
- 五十里ダムと川治ダム
  ／栃木県日光市

令和8年度作文コンクール 14

お役立ち連載
建設キャリアアップシステムを活用しよう！【第40回】 17

いつでもチェック!!

建設業しんこうWeb
建設産業の今を伝え
未来を考える

『建設業しんこう』は
Webでも
ご覧いただけます。



しんこうWeb 検索
https://www.shinko-web.jp/

メルマガ登録は
コチラから！

「建設業しんこう」に関するご意見・ご要望
TEL：03-5473-4584（企画広報部）
MAIL：kikaku@kensetsu-kikin.or.jp

印 刷：日経印刷株式会社
◎本誌記事の無断転載を固く禁じます。

【建設業しんこう編集委員】
東洋大学理工学部建築学科教授　浦江真人
国土交通省建設振興課長補佐　池田圭吾
(一財)建設業振興基金専務理事　長谷川周夫
国土交通省建設業政策調整官　山影一茂
日経クロステック建設編集長　佐々木大輔

特　集

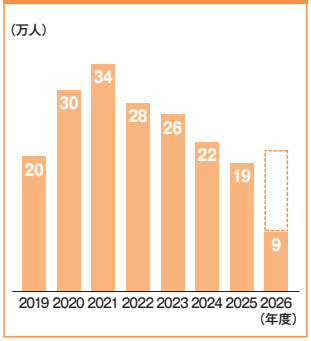
建設キャリアアップシステムの進化と可能性



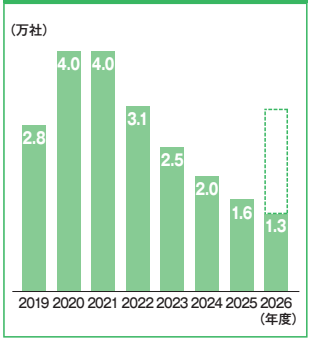
2019年から運用が開始された「建設キャリアアップシステム(CCUS)」ですが、早いもので8年が経過しようとしています。現在は登録のフェーズから運用・活用のフェーズに移行している期間となっています。少しずつですが、CCUSをうまく活用し、業務の効率化や技能者の処遇改善・社員の意識改革等、さまざまな運用を進めている会社が増えています。今回はCCUSに前向きに取り組んでいる会社の事例を紹介しますので、参考にしていただければと思います。

01 CCUSの活用状況について

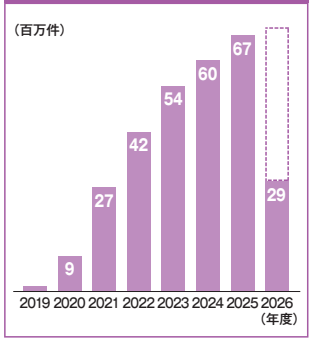
技能者登録
65%
累計191万人
建設技能者数：296万人
（R7平均 労働力調査より）



事業者登録
53%
20.6万社（一人親方除く）
工事実績有業者数：385,392社
（R6年度 建設工事施工統計調査報告より）



就業履歴蓄積
2億9,000万件
就業履歴あり技能者数：897,048人
（R7年度実績 CCUSデータより）



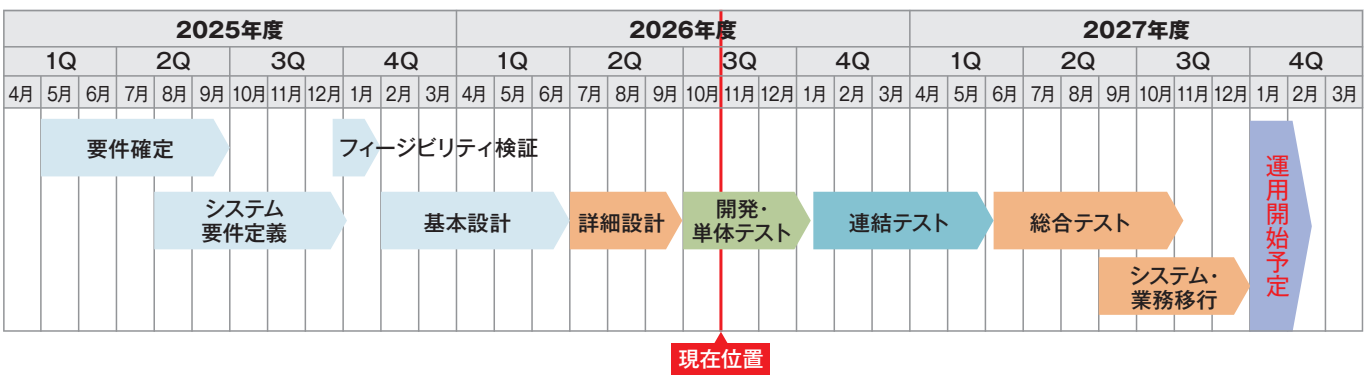
2026年度は4-8月の5ヶ月間実績を表示。点線は実績を12/5倍し年度末目安を示したもの。

CCUSは、技能者の資格・経験・就業履歴を業界共通の仕組みで蓄積し、その人の技能を正しく評価するための基盤です。2026年9月末現在で、技能者登録数は累計191万人（登録率65%）、事業者登録数は20.6万社（同53%）に達しました。技能者・事業者の登録増加に伴い、就業履歴も年々増え、昨年度は6,700万件の就業履歴があり累計で2億9,000万件蓄積されています。

登録者の伸びは緩やかになる一方で就業履歴の蓄積は加速しており、CCUSは制度を導入する段階から、現場で日々使いこなす段階へ移りつつあると言ってよいでしょう。

■CCUS次期システム構築のスケジュール

CCUSは2028年1月に生まれ変わります。
運用開始まで約1年となりました。施工体制登録時などの使い勝手を改善する予定です。



02 個社レベルでのCCUS利用例の紹介

1)「小規模建設会社のCCUS実践記録」建武工業（株）（福岡県）



建武工業（株）
林田 昌晃部長

CCUSを導入したのは、国の直轄工事における工事成績評定の加点対象となるためでした。公共土木工事が主体の建武工業にとって、加点は入札結果を左右する重要な要素です。しかし登録の過程で学ぶうちに、若手に明確なキャリアパスを示すCCUSのレベル別評価制度の有効性と、蓄積されるデジタルデータによる事務効率化の力に気付きました。単なる加点のためではなく、技能者と会社の未来のためにCCUSの普及に真剣に取り組んでいます。

1 きっかけ

工事成績評定の「加点」
・国の直轄工事で加点が得られると知る
・公共土木が主体の建武工業では入札を左右

当初の目的は「工事成績の加点」

▶

2 学びと気付き

登録の過程で価値を再発見
・レベル別評価制度→処遇改善・キャリアパス
・データ蓄積→省力化・効率化に直結

CCUSの有効性に気付く

▶

3 そして現在

CCUS普及への本格始動
・技能者と会社の未来のために
・協力会社と一体でCCUSを推進

普及に真剣に取り組む

■建武工業の取り組み全体像

CCUSレベルの見える化
レベルアップ意識向上

建退共とCCUSの連携による大幅な効率化
電子化・事務作業削減と信頼性向上

下請を置き去りにしない伴走支援
協力会社向けセミナーの開催
サポート窓口の設置

「現場目線」の独自ツール開発
独自マニュアル・入力シートの活用で
登録を円滑化

近隣工事も巻き込んだCCUS意識改革
応援自販機の設置
カード携帯の促進

建武工業では技能者の処遇改善と事務の効率化を5つの項目に分けて取り組みました。今回はその中からCCUSに関連したものを紹介します。

見える化で高まるレベルアップ意識（1）
CCUSレベル見える化からレベルアップまでの運用サイクル





建武工業では、各社員の現在のレベルと保有資格に加え、次のレベルアップに必要な資格や就業経験までを一覧にしてわかりやすく掲示しています。これにより、社員は自分の現在地と次に目指すべき目標をひと目で把握でき、一人ひとりの意識向上に繋がっています。

さらに、必要な資格については受講費用の負担や受験日程の調整など、会社として取得を全面的に支援するとともに、下請技能者に対してもその重要性を説明し、レベルアップを推奨しています。加えて、CCUSレベルを加味した給与体系とすることで、レベルアップが処遇に直結する仕組みを整えています。

このように「見える化 → 目標の明確化 → 取得支援 → 処遇反映」という循環を回すことで、社員が自発的にレベルアップを目指す風土が定着しています。

見える化で高まるレベルアップ意識（2）

- **掲示・共有：**社員一人ひとりのCCUSレベル・保有資格を一覧化
- **目標設定：**次のレベルに必要な資格・就業経験を個人ごとに明示
- **支援：**受講費用の負担や受験日程の調整を会社がバックアップ
- **処遇：**レベルを加味した給与体系とし、レベルアップを処遇に反映
- **更新：**取得状況・就業日数の進捗を定期反映し、達成を全体で共有
- **波及：**下請技能者へもレベルアップの重要性を説明



建退共とCCUSの連携による大幅な効率化

建退共を電子化してCCUSと連携させたことで、就業履歴がそのまま退職金の積み立てに直結する仕組みができました。これが非常に大きな変化でした。カードをタッチすれば退職金が貯まるという仕組みですから、履歴の蓄積に対する意識が自然と高まるのです。就業履歴の蓄積はCCUSレベルアップ判定にも欠かせない要素ですので、その意味でも大きな効果があったと感じています。下請会社から「全ての元請さんがこの仕組みになれば本当に助かります」との声もいただき、この連携によって下請会社の事務負担も大幅に削減できることを実感しています。

CCUSと建退共を連携させることで、元請、下請、技能者の3者全てにメリットが生まれる仕組みになっています。

1) 事務作業の大幅削減

就労管理表・実績報告書の作成が不要に。請求書等の郵送も省略し、下請を含め事務コストを大幅に削減

2) 制度の透明性向上

就業履歴に基づき掛金が直接充当されるため、充当漏れや流用を防止。制度運用の信頼性が向上

3) 技能者の意識向上

就業履歴がそのまま退職金積立に直結する仕組みにより、CCUS加入・カードタッチへの意識が向上

4) 下請会社からの高評価

短期間で多数現場を施工する下請会社からは、事務手続きの簡素化と掛金の確実な充当が高く評価された

■建退共の電子ポイント方式の解説

建退共の**電子ポイント方式**は、従来の「共済証紙を手帳に貼付する方式」を電子化したもので、建設業のDX推進やCCUSとの連携強化を背景に導入されました。従来の建退共は、金融機関で共済証紙を購入し、下請へ配布したうえで労働者の共済手帳に証紙を貼付・消印する仕組みでした。しかし、①証紙の購入・管理が煩雑、②元請から下請への交付事務が煩雑である、③証紙受払簿の作成が必要、④証紙の貼り忘れや不適切な管理のリスクがある、⑤公共工事書類の電子化に対応しにくい、といった課題がありました。このため、建設業全体のデジタル化の流れの中で、就労実績や掛金管理を電子化する「電子申請方式（電子ポイント方式）」が創設されました。

■ここからは従来の建退共「証紙貼付方式」から「CCUS自動連携・建退共電子ポイント方式」に変更した場合の特徴やメリットを比較図などを使用して公共工事の場合を参考に分かりやすく解説していきます。

証紙貼付方式

〈主な事務〉

1. 金融機関窓口での証紙購入（銀行等）
2. 発注者へ掛金収納書の提出
3. 下請から元請へ書類による就労報告
4. 元請から下請へ証紙の現物交付
5. 手帳へ証紙貼付と消印
6. 証紙の在庫管理、受払簿の作成

CCUS自動連携・建退共電子ポイント方式

〈主な事務〉

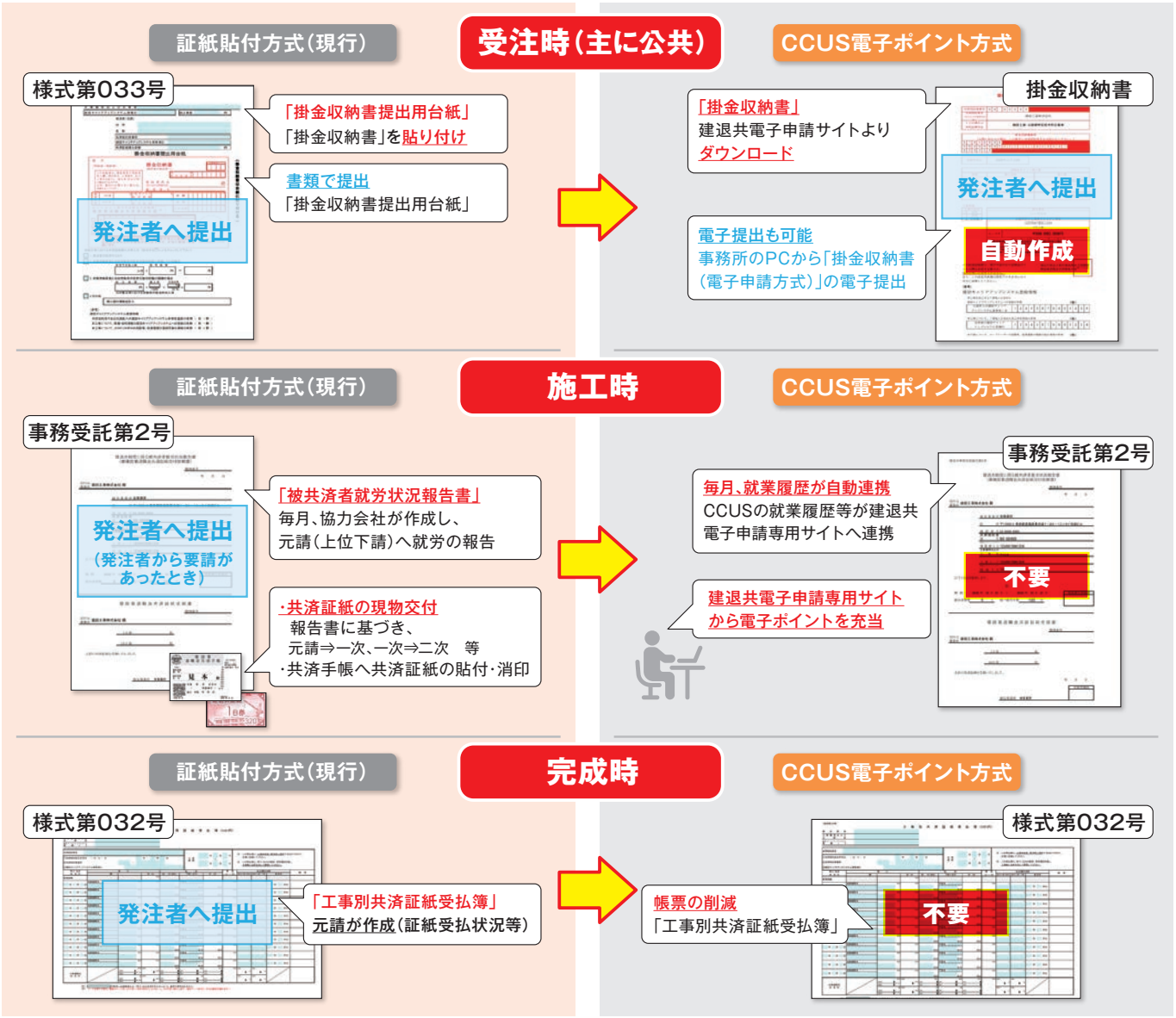
1. 事務所PCから退職金ポイント購入（インターネット）
2. 発注者へ掛金収納書の電子提出が可
3. CCUSで蓄積された就労履歴
4. CCUS就労履歴により就労報告が自動連携
5. 退職金ポイントの充当
6. 電子申請専用サイト上に各種帳票の自動作成、ダウンロード

メリット

- 金融機関窓口訪問の必要なし
- 電子提出が可能になる
- 元下間の書類のやりとり、証紙の現物交付、貼付等がなくなる
- 証紙管理不要、各種帳票の自動作成が可能になる

［建退共の資料をもとに建設業振興基金が作成］

■建退共のCCUS自動連携・電子ポイント方式の特徴



［建退共の資料をもとに建設業振興基金が作成］

2）「CCUSを活用した社員育成とバックオフィスDX」（株）長浜機設（愛媛県）

建設業界は深刻な人材不足という構造的な課題に直面しており、その解決には人材の確保と育成が欠かせません。ここではCCUSを軸とした人材育成プログラムを導入した長浜機設の取り組みについて紹介します。まず人事の核となる「成長支援制度」の概要と、その中心にある「成長シート」※の説明と導入で得られた2つの効果、そして今後の課題について紹介します。

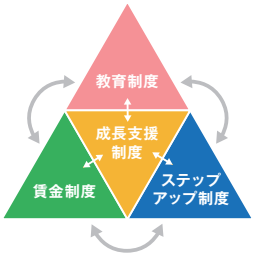
■「成長支援制度」の概要と「成長シート」

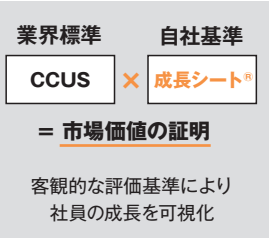
1）成長支援制度

職場の人手不足を解消するには、社員にとって「自分のキャリアパス」と「頑張りに応じた処遇」が明確であることが欠かせないと考えました。そこで業界標準のCCUSに、長浜機設独自の「成長シート」を掛け合わせ、社員の市場価値を客観的に示す仕組みを作りました。

長浜機設の制度は、この4つが連携して回っています。トライアングルの中心が「成長支援制度」＝入社から定年までの成長を支える考え方です。

①これに給与の見える化を行う「賃金制度」、②学びを支える「教育制度」、③現在地を確認する「ステップアップ制度」が組み合わさっています。





成長支援制度……定年まで継続的に成長を支援する
賃金制度……自身の成長と業績により昇給の見える化
教育制度……組織的に成長を支援する
ステップアップ制度……組織の中での成長の確認と目標設定

※「成長シート」は（株）ENTOENTOの登録商標です。

2）成長シートの特徴

「成長支援制度」の根幹を担うのが「成長シート」です。

人事評価制度を支援している（株）ENTOENTOの制度を活用したもので、CCUSの階段状の表と連動させることで、社員が「今どこを目指すべきか」を迷わずに済む羅針盤の役割を果たしています。

〈成長シート5つの特徴〉

社員を階層別に分け、CCUSのレベル（Lv.1～Lv.4）に対応させ、その上に長浜機設独自の「建設マスター」(Lv.5）を設けています。各レベルに必要な「経験年数」だけでなく「年収目安」「必要な資格」も明記し、職人にわかりやすい形にしています（下記参照）。

1. 階層別に分類
2. CCUSレベル（Lv.1～Lv.4）に対応
3. 各レベルの経験年数の目安を明記
4. 各レベルの年収・資格目安を明記
5. 職人さんにわかりやすい設計



3）成長シートの活用方法



成長シートの活用方法

01 昇給・賞与・昇格の判断材料として活用

02 年2回（上期・下期）評価・面談を実施

03 社員の成長を可視化・適切な処遇を実現



成長シートは、人事評価をする際の指標です。一般職・中堅職・幹部職それぞれで、一番期待する成果を決め、その成果を得るために必要な重要業務を設定します。本人・上司・社長が黄色の欄に点数を入れるだけで、評価表ができあがります。

〈成長シートの活用方法〉

運用は年2回の面談を中心とし評価を下すだけでなく、上期・下期でフィードバックを行い、目標設定を繰り返すことで、社員の成長を処遇に正しく反映させるPDCAサイクルを回しています。

■CCUSを活用した「成長支援制度」の効果（1）

効果① 社員の意識・成長

派遣現場での経験から管理職の必要性を痛感しました。今はCCUSと連動した社内制度が目標となり、迷いなく資格取得に挑戦できています。技能習得と並行し、着実にステップアップを目指します。

【ブルー土工】新卒4年目

現在はシルバーの職長ですが、目標は最高位の「ゴールド（登録基幹技能者）」です。その布石として2級土木施工管理技士を取得しました。将来への道筋が明確なので、常に高い意欲で現場に臨めています。

【シルバー土工】新卒8年目

22年の経験がありますが、前職ではCCUS未活用で実績が形に残っていませんでした。今は会社が経験を正しく評価してくれます。後輩の手本となるためにも1級土木に挑戦し、最高位のゴールドを取得します。

【シルバー土工】ベテラン中途入社

■CCUSを活用した「成長支援制度」の効果（2）

効果② お客様からの信頼

以前と比べて技能レベルが向上し、多能工化が進んでいる。それにより工期短縮やコスト削減が実現できている。

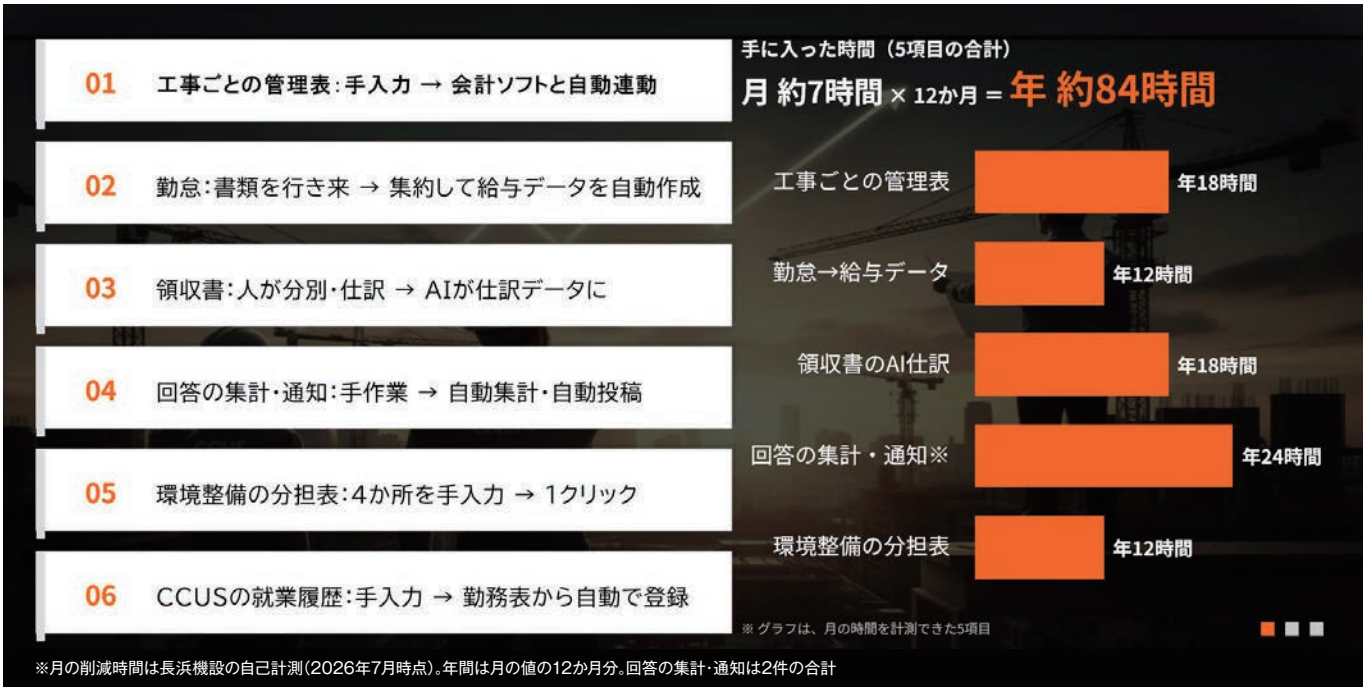
プラントマネージャーの声

CCUSを主体的に活用している会社は、社員の育成に真剣に取り組んでいると感じる。安心して仕事を任せられる。

元請 監理技術者の声

■事務のDX化

■問題解決会議（2025年度）で事務職の社員が選んだテーマ。IT勉強会で学び、社員自ら作りました。



※月の削減時間は長浜機設の自己計測（2026年7月時点）。年間は月の値の12か月分。回答の集計・通知は2件の合計

今後の課題

01 お客様理解の促進
CCUSと成長シートの価値を
より深く理解していただく

02 協力会社へのCCUS普及
協力会社への展開と
業界全体の底上げ

03 CCUS連動評価基準の見直し
実態に即した評価基準への継続的改善

まとめ

CCUS×成長支援制度は、
社員の「夢」と「会社の発展」を繋ぐ架け橋である。

人の成長こそが、
建設業のDXと未来を創る原動力となる。


第14期経営計画発表会

03 まとめ

「建設キャリアアップシステムの進化と可能性」をお読みいただきありがとうございました。CCUSを前向きにとらえ、CCUSをいかに活用して業務に繋げるかに真剣に取り組んでいる会社が、数多く見受けられるようになりました。CCUSに取り組んでいる全ての会社は他人ごとではなく将来の建設業を考え、人材の育成・若者が将来像を描ける産業への転換を目指しています。CCUSの現在の活用状況はまだ道半ばですが、いつかきっと、建設業で働きたいと思う若者があふれる産業になることを期待します。

第126回

FOCUS

見えないインフラを支える誇りと『マルチスキル』教育。“本物”に触れる実践的な学びで、社会から愛される技術者を育む！

千葉県内で唯一『設備システム科』を設置し、私たちの暮らしに欠かせないライフラインを支える技術者の育成に注力している千葉県立京葉工業高等学校。電気・機械・建設・化学といった幅広い分野を横断的に学ぶ『マルチスキル』教育を特色とし、企業や専門家と連携した実践的な教育を展開しています。今回は、同科で教鞭をとる成毛ちひろ先生に、社会と直結した学びの工夫や、生徒たちへの熱い想いを伺いました。



千葉県立京葉工業高等学校
設備システム科
成毛 ちひろ 先生

見えないインフラの重要性と『マルチスキル』教育

快適な生活を陰で支える、水や電気、空調などのライフライン。同校の設備システム科は、千葉県内で唯一、それらの設備技術を総合的に学ぶことができる学科だ。成毛先生は、この学科ならではの強みを次のように語る。

「本校の設備システム科の最大の特色は、電気・機械・建設・化学といった様々な分野をすべて網羅して学べる点にあります。私たちはこれを『マルチスキル』と呼んでいますが、入学時点で将来の方向性が完全に決まりきっていない生徒であっても、幅広い分野を横断して学ぶ中で、自分の得意なことや本当にやりたいことを見つけられる環境が整っています。また、配管や設備といった仕事は、建物の壁や床の中に隠れて見えにくいものですが、生活に不可欠なライフラインを守り、ときには大型建築物の内部を根底から支える非常にスケールの大きな仕事でもあります。生徒たちには、そうした“社会の当たり前を支えている”という誇りを伝えています。見えにくい仕事だからこそ、その必要性を実感してもらうことが重要だと考えています」。

実社会と直結した実践的な学びの数々

設備分野の仕事は日常生活で直接目に触れる機会が少ないため、同科では生徒が“本物”に触れる機会を積極的に設けている。その代表例が、外部の企業や団体と連携した出前授業や現場見学だ。

「企業様や各種協会様とのご縁を大切にし、実際の仕事内容や最新の技術を肌で感じられる機会を多く設けています。例えば、空調設備関連の企業の方に進路に向けたお話を直接していただいたり、給湯器メーカーの方にお越しいただき、実際に機器を解体する実技的な授業を行ったりしています。また、防災協会様のご協力で、火災報知器の作動や学校の消火設備からの放水を実際に体験する機会もあります」。

校外に飛び出しての学びも充実している。

「インターンシップでは、大型商業施設の裏側や空港内の設備を見学したり、工場の配管の耐熱・強度試験や新製品開発の現場を見せていただいたりしています。また、専門学校の充実した実習施設をお借りして、透明な配管で排水の仕組みを見学した際は、生徒たちも“普段自分たちが使っている設備はこうなっているのか”と驚き、興味を深めていました。見えにくい仕事だからこそ、現場のスケール感やリアルな仕組みを直接見ることが、学校の授業と社会をつなぐ大切な架け橋になっています」。

配管実習　プロの技に触れながら学びを深める！



外部の専門家を招き、4回連続の授業を1セットとする『マイスター制度』を導入している設備システム科。水道管の建築配管実習や空調冷媒配管実習などで、プロの技能者が直接指導にあたる。「教員自身も一緒に技術を確認しながら、生徒に本物の技術を継承できる素晴らしい仕組みです」と成毛先生。この実習を機に興味を持ち、技能検定対策講座へと進む生徒もいるなど、大きな学びと刺激につながっている。







自発性を促す資格取得と人間力の育成

設備業界全体での人材需要は極めて高く、同科に寄せられる求人は年間数千件にものぼ

るという。引く手あまたの有利な就職環境にある中でも、成毛先生が生徒たちに最も強く求めているのは、社会人としての基礎力の徹底だ。「大変ありがたいことに毎年多くの求人をいただき、生徒たちを"金の卵"として大切に育てていただいています。だからこそ、学校では技術を身につける以前の"当たり前のことが普通にできる"教育を一番大切にしています。遅刻や欠席をせずきちんと学校に来る、しっかり報告や連絡をする、元気よく挨拶をする。そして何より、周囲の状況を見て、今何をすべきかを察して気配りができることです。生徒にはよく"察して動くように"と指導しています。社会に出れば、知識や技術は現場で後からでも学べますが、素直に学ぶ姿勢やコミュニケーション力は絶対に欠かせません。先輩方に可愛がってもらえる、応援される人物になってほしいと常に伝えています」。

資格取得のサポートにおいても、生徒の自主性を重んじている。

「電気工事士や危険物取扱者などの資格については、全員に一律に受けさせるのではなく、少人数制のメリットを最大限に活かした個別指導を基本としています。資格は人から言われて取るものではありません。生徒自身が自発的に"受けたい・教えてほしい"と相談に来てくれれば、私たち教員はいくらでも手厚くサポートします。そうした自主的な姿勢こそが、困難を乗り越える力につながると信じています」。



「中学生向けの体験入学では、設備システム科ならではの建築配管実習を体験してもらいます。実際に工具を使って管を回したり切断したりすることで、ものづくりの楽しさをダイレクトに伝えています」と語る成毛先生。学科内だけでなく、産業教育フェアなどの場でも積極的に設備分野の魅力を発信するなど、一人でも多くの若者にライフラインを支える仕事の重要性を伝えるべく奔走している。



一般社団法人千葉県空調衛生工事業協会の主催、株式会社ヤマトの協力により、"未来をつくる建設の仕事を知ろう!"をテーマにした出前授業が開催された。クイズ形式やグループディスカッションなど、生徒参加型のプログラムで実施。さらに、3Dスキャンで校舎内や自分たちの授業風景を撮影した映像が公開されると、生徒たちは大いに盛り上がり、楽しみながら業界への理解を深めた。

生徒の想いを尊重し、共に成長を喜ぶ

自身も工業高校の出身である成毛先生。ものづくりの楽しさに魅了されて工業の道を志し、高校時代の恩師の言葉をきっかけに教職の道へ進んだ。当時の経験は、現在の生徒指導や部活動にも活きている。「私自身が工業高校で新しいことを学ぶ楽しさを実感したので、生徒たちにもその面白さを伝えたいと思っています。また、顧問を務める剣道部でも、先輩後輩の関わりや主体的に練習を考える力を重視し、社会に出てから必要な集団行動や主体性を身につけさせています。進路指導においては、保護者の方の様々なご意向もありますが、最終的には生徒本人が"自分で決めた"と心から思えるようにサポートすることを心がけています。自分で決断したという実感が、その後の社会人としての責任感や頑張りに必ずつながるはず。生徒が自ら考え、納得して進路を選べるよう、常に寄り添い続けています」。

生徒と真摯に向き合う日々の中で、一番の喜びを感じる瞬間について笑顔で語ってくれた。「やはり、入学した頃は幼さも感じた生徒たちが、立派に成長して無事に卒業式を迎える瞬間に最もやりがいを感じますね。これだから教員はやめられないな、と心から思います。そして、卒業した教え子たちが学校に顔を出してくれたり、進路発表会で後輩たちに向けて立派にアドバイスをしている姿を見ると、その成長ぶりを感じて胸が熱くなります」。

色紙に書かれたメッセージは『Brand New Day』。――常に新しく、進化し続けること。ヒーローの言葉にもなぞらえた成毛先生の熱いエールを胸に、生徒たちは今日も新しい日々を切り拓き、社会を支える技術者へと成長していく。



コレ推し! 地元の建造物



千葉県文化会館

成毛先生が選んだのは、千葉県文化会館。1967年に開館したこの建物は、戦後日本を代表する建築家の一人である大高正人氏の設計による貴重な近代モダン建築として知られています。力強いコンクリート打放しの外観と、周囲の自然や地形と見事に調和したスケール感は圧巻。長年にわたり県民の文化芸術の拠点として親しまれており、建築を学ぶうえでもぜひ一度は足を運んでおきたい名建築です。





千葉県立京葉工業高等学校

〒263-0024　千葉県千葉市稲毛区穴川4-11-32

URL https://cms1.chiba-c.ed.jp/keiyo-th/

どうする内水氾濫？ 従来型のハード対策だけでは不十分

日経コンストラクション編集長　真鍋 政彦

今年は全国で水害に悩まされた。線状降水帯や台風などで記録的な大雨が発生し、今年度から運用が始まった警戒レベル5相当の特別警報が多数発令された。激甚化する大雨に、ハード対策だけでは人的被害を防げなくなっている。水がたまる場所へ近寄らせないといった行動変容を促す対策などが重要な鍵を握る。

建設分野の取材を続けて、今年で20年目になる。これまでいろいろな水害の現場を取材してきたが、今年ほど短期間で複数の水害に見舞われた年はなかったのではないか。水害に対する皆の関心が高まったり、都市部で水害が発生する回数が多かったりしたため、報道される機会も心なしか増えている気がする。

主だった水害を振り返りたい。8月中旬に発生した千葉豪雨では、24時間降水量が367mmの記録的な大雨で、13人の死者、46人の負傷者が出た。8月末には北陸地方での記録的大雨、9月に入ると名古屋市で線状降水帯による記録的な大雨、そして9月下旬にはまたもや千葉県を中心とした台風25号による大雨などで被害が増大している。

特に台風25号では千葉県北部の印旛沼が3地点4カ所で決壊。国土地理院の浸水推定図を基に算出すると、最大で5km^{2}以上が浸水したとされる。昼夜の懸命の施工により、10月3日までに全箇所で応急措置が終わった。一刻も早い本復旧が望まれる。

筆者が注目したいのが、8月の千葉県や9月の名古屋市で起こった内水氾濫だ。堤防の決壊などで起こる外水氾濫に対して、内水氾濫とは下水道などの処理能力を超える雨が降り、排水しきれず市街地で水があふれる現象を指す。

名古屋市の例では、観測史上最大の豪雨であったが、巨大調整池が水をため、道路冠水等の被害は最小限に抑えられたといわれる。災害対策のたまものだ。ただ手放しで、喜べるわけではない。財政力を考えると、どの自治体も名古屋市と同様の対策が取れるわけではないからだ。

財政力が比較的豊かな東京都でさえも目標降雨は区部で1時間85mmだ。今回の全国を襲った大雨から考えると、時間雨量100mm級は決して珍しくなく、都でさえも完全には太刀打ちできないことになる。

アンダーパスで起こった悲劇 排水設備だけに依存しない「多重防御」へ

もう一つ、今回の内水氾濫で注目されたのが、道路や鉄道と交差し、急激に道路が低くなっている区間（アンダーパス）での事故だ。千葉豪雨ではアンダーパスが冠水し、そこに車が乗り入れ、そのまま水没して乗っていた人が死亡する事故が2件発生した。

災害後、アンダーパスの排水ポンプが正常に作動しなかった、一度進入すると引き返したり待避したりできる空間がなかったなど、いろいろな問題が明らかになっている。国土交通省は10月6日、アンダーパスでの冠水事故防止に向けたガイドラインを作成。「排水設備などだけに依存するのではなく、通行規制や車両進入防止策を組み合わせた多重防御」の考えを明示した。

豪雨災害の激甚化で、内水氾濫でも甚大な人的被害が生じる時代となった。今後もハード対策はできる限り実施するに越したことはない。ただそれだけでは不十分だということを今回の水害は突きつけたのではないか。

例えば、水がたまりそうな場所に人を近寄らせないといった行動変容を促す対策が重要になる。近隣住民だけでなく車で移動中の人にもどう行動変容を促すか。分かりやすい掲示板の設置や緊急情報の発信、車両通行データのカーナビとの連動などが求められる。



印旛沼の「船形干拓」の決壊堤防で進む緊急復旧工事。2026年9月29日に周辺の道路から撮影（写真：日経クロステック）



JR内房線をくぐる国道16号の地下道「村田町アンダーパス」。水没した車に乗っていた男性が死亡した。2026年8月18日撮影（写真：日経クロステック）

第6回

完工後に赤字に気づく会社と、工期中に手を打てる会社

株式会社大塚商会　業種SIプロモーション部(建設プロモーション)　浅賀 竜哉

経営者からよく聞く悩みに、「忙しいのに利益が残らない」がある。受注はある。社員も協力会社も走り回っている。それでも予想より利益が薄い。原因は、工期中に収支の変化をつかめていないことにある。

工期中に利益が見える会社は、赤字を"結果"ではなく"兆候"としてつかめる。兆候が見えれば、追加見積の相談、発注明細の見直し、人工調整など、工期中に対策できる。今回は事例をもとに、利益の見える化が経営判断をどう変えるのかを考えてみたい。

Case 完工後にしか利益がわからない会社

この企業では、見積、発注、日報、請求、支払、会計が別々に管理されていた。見積と実行予算はExcel、注文書・請書はFAX、請求書は月末にまとめて処理。情報が分断され、社長が工期中に確認できるのは「現場が忙しいか」「請求書が届いたか」程度だった。

ある月、大規模な現場が完工した。受注時は利益が出る見込みだったが、追加人工、材料変更、協力会社への追加発注が重なり、利益はほとんど残らなかった。現場監督は「途中で危ないとは思っていた」と話したが、現場の違和感が数字として共有されていなかったのである。

社長は言った。「終わってから赤字だとわかっても、もう打つ手がない」。DXの差はここで表れる。現状収支を工期中に把握し、次の判断につなげる仕組みが必要なのである。

何が変われば、工期中に利益が見えるのか

目指したのは、現場ごとの収支を工期中に可視化すること。完工を待たずに、「利益率が下がっている」「追加交渉が必要だ」「このままでは予算を超える」といった兆候をつかめる状態である。会計処理を早めるだけでは、赤字の芽は摘めない。

見える化の効果は、数字が見えることではなく、手を打てること

利益が見えると、会議の内容が変わる。以前は「どの現場が忙しいか」「何をする人が足りないか」という進捗確認が中心だった。今では「人工が増えている」「材料変更分を修正予算に反映できているか」「次回は単価を見直すべきか」といった、次の手を考える議論に変わった。

数字は社員を責めるためではなく、早く気づき、手を打つために使うものだ。現場の感覚と数字がつながれば、経営者は対策を早く判断できる。工期中に利益が見える会社は、現場を守るために数字を使う会社だと言える。

導入企業に見るバックオフィスDXの実践例

最後に、一歩進んだ事例を紹介したい。その企業は原価の見える化に取り組んでいたが、収支確認は月末の会議が中心で、数字の把握にタイムラグがあった。予算超過の兆候をつかんでも、すぐに対策へ移せない状況を変える必要があった。

そこで、協力会社との発注・査定・請求書受領のやりとりを現場単位で施工管理アプリに集約した。発注時から原価要素を持たせ、原価・会計システムとAPIでつなぐことで、収支状況をほぼリアルタイムに把握できるようにした。加えて、手作業に依存していた業務も大きく減らすことができた。

【具体的な効果】

収支把握	発注残(未来の予定原価)を含めた予算消化を把握できるようになった。
工数削減	今までは2人で丸一日かかっていた請求書の仕分け作業が、アプリ上の現場軸運用により、工数をほぼ不要にできた。
二重入力削減	発注時に原価要素を持たせ、会計仕訳との連携により二重入力の解消、完成工事原価報告書の自動作成が可能になった。

＊　　＊

建設業の事務処理は煩雑になりがちだ。だが、現場を軸に情報がつながると、DX効果は他業種より顕著に現れる。完工後に利益を知る会社から、工期中に利益をつかむ会社へ。この違いこそが「単なる業務効率化ではなく経営のスピードを変えるDXの本質」である。

第66回 かわいい土木

お隣さんダムと水をやりとり

鬼怒川上流は、大小さまざまなダムが密集する「ダム銀座」。なかでも国土交通省が管理する五十里ダム、川俣ダム、川治ダム、湯西川ダムは高さ100mを超えるハイダムだ。この秋、4つのうち互いに水をやりとりしている五十里ダムと川治ダムを訪れた。周年記念のスペシャルなダムカードをもらえる今年は、ダムファン以外の人にもお勧めだ。

五十里（いかり）ダムと川治ダム
栃木県日光市

Photo・Text ▶ フリーライター 三上 美絵

大成建設広報部勤務を経てフリーライターとなる。「日経コンストラクション」（日経BP社）や土木学会誌などの建設系雑誌を中心に記事を執筆。広報研修講師、社内報アワード審査員。著書『土木技術者になるには』（ぺりかん社）、本連載をまとめた『かわいい土木 見つけ旅』（技術評論社）

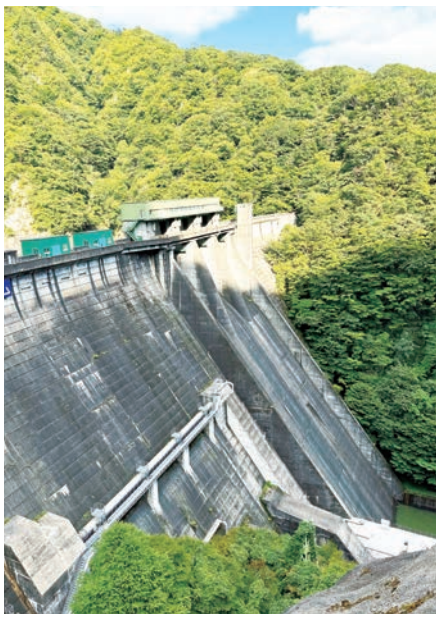


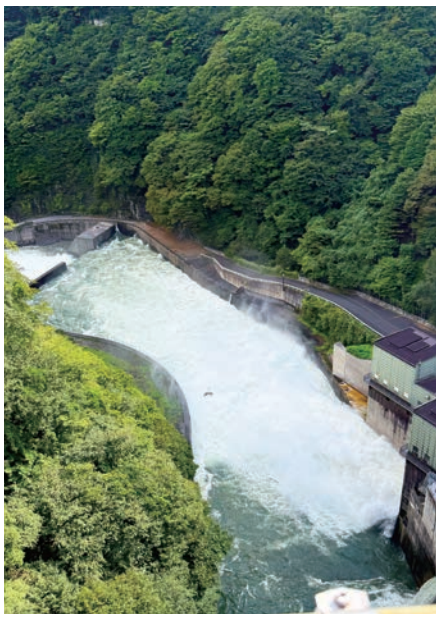
「あ、お醤油切らしちゃった！」というとき、今なら近所のコンビニや夜間も開いているスーパーへ走ればこと足りる。だが、そんな便利な店のない昭和時代の半ばぐらいまでは、休日や夜間に調味料や米を切らしていることに気づいたら、「お隣さんに借りる」のがごく普通のことだった。「困ったときはお互いさま」と、貸し借りをしていたのだ。

日光・川治温泉の近くにある五十里ダムと川治ダムは、これと似たようなことをしている珍しいダムだ。お互いのダム湖の水が多くなりすぎたり、足りなくなったりしたとき、両者をつなぐ導水トンネルを通じて水のやりとりをしている。

怒涛渦巻く大迫力！ 五十里ダムの環境放流

この秋、私が五十里ダムを訪れたのは、月に1回実施されている「環境放流」を見たかったからだ。環境放流とは、ダム下流の河川環境を自然な状態に保全するために実施する放流のこと。水の勢いによって、川底に溜まった土砂や藻などを洗い流すのが目的だ。





▲五十里ダムと環境放流の様子（右）。コンジットゲートから噴き出す水が次第に勢いを増して怒涛になった。

放流の開始前、ダムサイトにサイレンが鳴り響く。展望台の脇から続く細い階段で、ダムの天端（てんば）へ降りてみた。1956（昭和31）年に完成した五十里ダムは、利根川水系の大ダムの第一号。堤の高さは112mあり、当時は日本一の高さを誇るダムだった。

数分後、堤体の右岸中ほどにある「コンジットゲート」から水がほとばしり始める。ダム最上部にある「クレストゲート」は非常用で、環境放流や日常の水位調節にはコンジットゲートを使用するのだ。

水はみるみる勢いを増し、激しい怒涛となった。放流の勢いを緩和する「減勢池」の壁に打ち当たった波が、冬の日本海さながらにしぶきを上げている。国土交通省鬼怒川ダム統合管理事務所によれば、五十里ダムの環境放流の水量は、ピーク時には毎秒100㎥に及ぶ。黒部ダムの観光放水は毎秒10㎥なので、その10倍に当たる大迫力だ。

大切な水を無駄にしない エコな連携プレー

放流の後、「ダムカード」をもらうために管理事務所を訪ねた。すると、通常のカードだけでなく、「五十里ダム完成70周年記念」のスペシャルカードまでいただけた。建設当時のモノクロ写真が使



▲五十里ダム（前ページ）と川治ダム（上）。目的はいずれも洪水調節と不特定利水（河川環境維持や不特定多数のために水を供給すること）のほか、五十里ダムは発電、川治ダムは工業用水の供給なども行う。

われていてかっこいい！ さらに、お隣の川治ダムへ行けば、もう1枚のスペシャルカードをもらえるという。これはもう、行くしかない。

タクシーで約3分、あっという間に川治ダムに着く。五十里ダムがどっしりとした重力式コンクリートダムであるのに対し、川治ダムは優美な曲線を描くアーチ式コンクリートダムだ。高さは140mで、鬼怒川上流のダムで最も高い。上部のオーバーハングがダイナミックだ。完成は1983（昭和58）年。管理事務所で、通常のカードとお目当ての「鬼怒川上流ダム群連携施設完成20周年記念」のカードをゲット。

じつは、この「鬼怒川上流ダム群連携施設」こそが、冒頭の“お醤油の貸し借り”ならぬ“水のやりとり”のための施設だ。具体的には、男鹿川にある五十里ダムと、山を隔てた鬼怒川にある川治ダムの間を結ぶ導水トンネルとポンプ機場などを指す。

二つのダムはもともと、それぞれに悩みを抱えていた。五十里ダムは貯水容量が少なく、雪解けや梅雨、台風の季節などには、貯めきれない水を使わないまま放流していた。一方、容量の大きい川治ダムは、いったん貯水位が下がると、なかなか回復することができなかった。



▲五十里ダムと川治ダムのダムカード。連携施設20周年のカードは、両方のダムを訪れた人だけがもらえるレアカードだ。

両者が導水トンネルでつながった今は、雨の多い季節には五十里ダムが貯めきれない水を川治ダムへ送る。雨の少ない季節には、下流の川の流量を維持するために、川治ダムに預かってもらっていた水を五十里ダムへ戻す。これにより、五十里ダムは捨てていた水を有効活用できるようになり、川治ダムも貯水位をキープできるようになった。

二つのダムの“お互いさま精神”は、昭和っぽくてドボかわいい。だが、既存のダムを改修して効率を上げる発想は、エコであり最先端なのである。

アクセス

日光宇都宮道路・今市ICから
五十里ダムまで車で約36分
（電車なら川治湯元駅から
徒歩約20分）。
そこから川治ダムへは車で約3分。

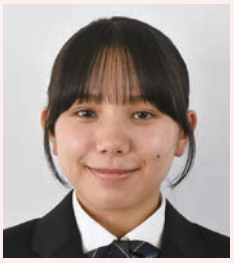
令和8年度「作文コンクール」受賞作品が決定！

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、高校生の方と建設産業で働く方を対象とする作文コンクールを実施し、優秀な作品を表彰しています。今回は、国土交通大臣賞に選ばれた3作品をご紹介します。





高校生の作文コンクール　国土交通大臣賞 受賞作品



長崎県立
長崎工業高等学校
建築科2年
川上 小夏 さん

国境を越えて子供たちの未来を守る建築産業

受賞者へインタビュー　■Q1 このような素晴らしい賞をいただき、大変光栄に思います。この作文を通して、「日本の建築技術で世界の子供たちの未来を守りたい」という私の思いが、少しでも多くの方に届いたことを心から嬉しく思います。　■Q2 もともとアクセサリーなどのものづくりが好きでした。自分の好きなものづくりを通して貧困で苦しんでいる人々に安心できる空間を届けたいという夢を実現できるのは、建築の知識だと考え建築科に進学しました。　■Q3 専門教科では構造、設計、計画、施工などの座学から木材加工、測量実習、製図、CADといった幅広い技術を身につけています。また、現場見学で実際の建設現場を肌で感じ、将来を見据えた学びができています。　■Q4 卒業後は、施工管理の立場から建設業の仕事に携わりたいと考えています。そして、国境や文化の違いを乗り越え日本の建築技術を生かして貧困で苦しんでいる人々に安心して暮らせる空間を届けたいと思っています。

建築科に入学して1年が経った頃、私はある変化に気がついた。車窓から通り過ぎる家々を眺めるとき、無意識に屋根の造りや外観を追いかけている自分に気づいたのだ。1年前、まだ何も知らなかった私は、建築の良さや楽しさが正直分からずにいた。しかし、構造の授業で木造建築の仕組みを学び、設計の授業で部材にかかる力を計算するうちに、目に見えない設計が「安心できる生活」に直結しているのだと肌で実感した。専門知識が増えるたび、今まで見えていなかった世界が見えるようになり、普段の生活がパッと明るく、楽しくなっていく。街を歩いていると工事現場を見つけることがある。以前の私は何気なく通り過ぎていたが、今では思わず足を止めて見てしまう。ある日も、気が付けば工事現場の写真を二枚、三枚撮っていた。どのような工程で建物が造られているのか、どのような技術が使われているのかが気になって仕方がなかったのだ。建築を学び始めたことで、身近な風景の見え方が変わり、自分の世界が大きく広がったと感じている。

そんな高揚感の中に、私のブレない夢の原点がある。小学校5年生の時、私は『マザー・テレサ』の本に出合った。スラム街の貧困や紛争の中で生活する人々に寄り添い、愛を注いだ一人の修道女の実話だ。当時の私は、私たちが当たり前のように暮らす「家」や、学校、病院がない世界があることに強い衝撃を受けた。そして、「世界中の子供たちが貧困や戦争に苦しまず、安心して生活できる環境を作りたい」という強い願いを抱いた。その一途な思いを胸に、私は建築科へ入学したのだ。

2年生になった今、施工や計画など学ぶことはさらに増えている。建築が楽しくなる一方で、世界を見渡せば、今なお世界人口の7人に1人、約11億人もの人々が貧困に苦しんでいる現実に直面する。彼らには安心して眠れる家も、未来を築く学校や病院もない。その事実を知った時、胸が締め付けられるような悲しみと同時に、「私の学ぶ建築で、彼らの力になりたい」という強い使命感が込み上げた。言語も文化も異なる異国の地で働き、生活することは決して簡単ではないだろう。それでも、日本では災害を経験する中で多くの建築技術者がより安全な生活を営むための建物を造る技術を発達させてきた。人々の命を守るために積み重ねられてきた技術や知恵は、世界のさまざまな地域でも役立てることができると考えている。日本が誇る高い耐震性などの「安全性」や、空間を自由に変化させられる「柔軟性」は、海外の貧困地域にこそ必要とされる強みであるはずだ。日本の建築の素晴らしさを世界へ届け、子供たちの命と未来を守る環境を築くこと。それこそが、世界平和へと大きくつながる道だと私は信じている。

建築は、人が一生を生き抜くためになくてはならないものだ。だからこそ、戦争や紛争で建物が破壊されるような不条理は、絶対に許されてはならない。いつか世界中の子供たちに「当たり前の安心」を届けるために。私は今、目の前にあるすべての授業や課題に真剣に向き合い、夢を現実にするための確かな知識と技術を身につけていく。

受賞者へインタビュー　高校生の作文コンクール

Q1 受賞された感想を教えてください。
Q2 なぜ工業高校に進学しましたか？
建設系の勉強をしようとおもったきっかけ 等
Q3 学校ではどのような勉強をしていますか？
Q4 将来の夢を教えてください。



熊本県立翔陽高等学校
総合学科
工業系列建築3年
茂田 禅将 さん

私を築く建設業

受賞者へインタビュー　■Q1 受賞を聞いたときは、正直実感が湧きませんでした。しかし、自分の夢に対する思いが自分以外の人にも伝わり、評価していただけたことをとても嬉しく感じました。この受賞を励みに、私自身が建設業の魅力を伝えられる存在になっていきます。　■Q2 作文にもある通り、10年前の地震で被災した経験から、誰かの命と暮らしを守る地震に負けない街づくりをしたいと思ったことがきっかけです。その思いの実現のため、専門的な知識も学べる総合高校に進学しました。　■Q3 学校では、普通教科と建築に関する専門的な勉強にも取り組んでいます。CADを使った図面作成や構造設計、法規、実習の木材加工などを通して建築の知識と技術を学んでいます。また、資格取得のための勉強など、自身の将来につながる学習にも取り組んでいます。　■Q4 私の将来の夢は、建設業界で人々の命と暮らしを守る仕事に携わることです。建築の学びを深めるうちに、設計と現場の両方の知識や技術を活かせる仕事を目指したいと考えるようになりました。将来は、災害に強い街づくりに貢献したいです。

幼い頃、私はよくダンボールで家を作って遊んでいた。屋根をつけ、窓を切り抜き、自分だけの小さな空間を作り上げる時間が好きだった。「将来は本物の家を建てる人になりたい」と、その頃から漠然と思い描いていた。

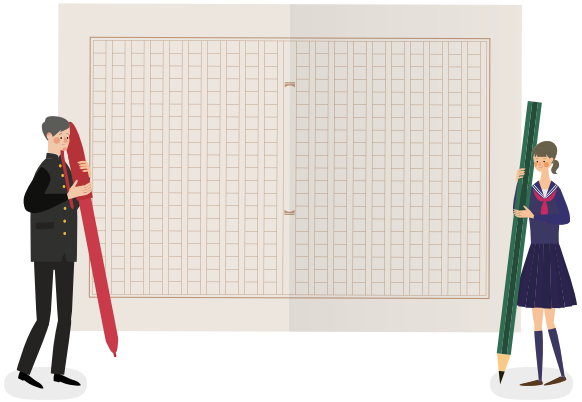
そんな夢を持っていた私の世界を、一夜にして変えた出来事があった。2016年の熊本地震だ。地震が起きた夜、激しい揺れとともに近所の建物が崩れ落ちる音が聞こえた。翌朝、外に出た私が見たのは、見慣れた街の姿ではなかった。道路には亀裂が走り、家屋は傾き、昨日まで当たり前にそこにあったものが一夜にして姿を消していた。安心して帰る場所が失われるということが、こんなにも人を不安にさせるのだと、子どもながらに胸が痛くなった。

それから数日が経ち、街のあちこちで復旧工事が始まった。その中に、母の知り合いで私も顔なじみの作業員の方がいた。子どもの頃からよく気にかけてくれていたその方が、現場の脇を通りかかった私に声をかけてくれた。いろいろ会話する中で、こんな言葉をくれた。「俺たちの作業が注目されることは少ないかもしれない。でも、俺たちがいることで、またみんなが安心できる家ができ、命を守ることができる。だから頑張れるんだ。」いつも穏やかに笑っていたその方の目が、そのときは真剣な光を帯びていた。

その言葉が、私の胸に深く刺さった。注目されなくてもいい。誰かの命と暮らしを守るために、黙々と手を動かし続ける。知っている人の口から出たその言葉は、本物の重さで私の中に響いた。その夜、私は初めて自分の将来をはっきりと思い描いた。建設業に就く、と。

高校で建築を学び始めると、この産業の奥深さと厳しさを同時に知ることになった。構造学では、建物一棟を支えるために無数の計算と判断が積み重なっていることを学んだ。木造・鉄骨・RC造それぞれの工法が、気候や用途、コストによって使い分けられることも知った。実習で初めて墨付けに挑んだとき、わずかなズレが構造全体の狂いにつながると知り、手が震えた。やり直すこと三度、ようやく一本の線が正確に引けたとき、先人たちが長い年月をかけて築いてきた技術の重みを、全身で感じた。また、建設業の就業者数がピーク時の685万人から約200万人も減少し、29歳以下の若者がわずか１割程度しかいないという現実にも向き合った。あの方が命がけで守ろうとしていたものを受け取る人間が、今この産業には圧倒的に足りていない。その事実が、私の背中をさらに強く押した。

ダンボールで夢を描いた子どもが、今度は本物の家を建てる番だ。建築士の資格を取得し、設計と現場の両方を知る職人として、熊本の人々が安心して暮らせる街づくりに貢献したい。震災で傷ついたこの街を、次の世代が誇れる街へと変えていくことが、私の目指す姿だ。あの方が私に言葉をくれたように、私もいつか誰かの背中を押せる人間になりたい。注目されなくていい。誰もが安心して眠れる熊本の街をつくるために、私はこれからも学び続ける。



受賞者へインタビュー　高校生の作文コンクール

Q1 受賞された感想を教えてください。
Q2 なぜ総合高校に進学しましたか？
建設系の勉強をしようと
おもったきっかけ 等
Q3 学校ではどのような勉強をしていますか？
Q4 将来の夢を教えてください。



株式会社大林組
山本 美穂さん

一人で抱え込まないと決めた日

受賞者へインタビュー　■Q1 定年まで残りわずかとなり、自分の経験や考えを後進に伝えたいと思って応募しました。このような大きな賞を頂き大変光栄です。拙い経験談ですが、若い世代の皆さんの参考になれば幸いです。　■Q2 父方の祖父が工務店を営んでおり、子どもの頃から工事現場によく連れて行ってもらいました。上棟式で屋根の上から餅をまいた思い出もあり、ものづくりの楽しさや現場の活気に親しんで育ったことが入職の原点です。　■Q3 福岡市内で、既存地下街と新築ビルを結ぶ地下接続通路工事の現場所長を務めています。供用中の道路や地下埋設物が密集する都市土木工事において、安全・品質・工程の総合管理を行っています。　■Q4 まずは現在担当している工事を無事故・無災害で完成させることです。そして残された現役期間の中で、自分が培ってきた経験や判断の考え方を若い技術者へ伝え、次世代の育成に役立てたいと思っています。

「お母さん、僕のこと嫌いになって、お家にいないの？」

その言葉を聞いたとき、私は答えることができなかった。

二十年ほど前、息子が六歳になった頃のことだ。私は結婚・子育てを機に現場勤務から常設部門に配属になり、息子の成長とともに七年ぶりに現場勤務へ戻る希望を出した。ものづくりが好きでゼネコンに入ったからである。そんな私にとって久しぶりの現場は、土の匂いも、空の青さも、図面を手に歩く時間も、胸が躍るほど楽しかった。工程を組み、協力会社の皆さんと段取りを詰め、少しずつ構造物が形になっていく手応えが、私を前に進ませていた。

ところがある時、その現場で大きな物損事故が起きた。元請社員として近隣対応に追われ、日曜も含めて出勤が続き、毎朝五時過ぎに家を出て帰宅は深夜、そんな日々が一か月近く続いた。責任を果たすには「私が踏ん張るしかない」と思い込み、家のことは夫に任せきりになった。久しぶりに息子が起きている時間に帰宅した夜、彼は泣きながら冒頭の言葉を投げかけた。私は、現場での責任と母親としての役割の間で立ち尽くし、「一人息子を泣かせてまで、この仕事を続ける意味があるのだろうか」と自分を責めた。

あの頃の私は、責任感とは「一人で抱えること」だと信じていた。判断を下す立場の人間は弱音を吐いてはいけない、誰かに頼るのは甘えだ、と。けれど現場は、そもそも一人で完結する仕事ではない。測量、資材、重機、交通誘導、近隣調整。少しでも歯車がずれれば、工程も安全も品質も崩れる。私が抱え込み、視野を狭めた瞬間に、チーム全体の動きは鈍くなる。

転機は、苦しさの只中で見えてきた。逃げずに現場と向き合い、やり切るしかない一方で、家庭を支える夫の存在がなければ私は立っていられなかった。あの経験は、責任ある立場で判断する覚悟の原点になったと、今では思っている。覚悟とは、孤独に耐えることではなく、必要なときに助けを求め、状況を共有し、最善の手を選ぶことだ。

それ以来、私は「抱えない」ことを仕事の基本動作に置くようになった。問題が起きたら、まず情報を開き、関係者を集め、選択肢を並べる。自分の中で結論を固める前に、現場の声を聞く。図面だけでは見えないリスクを想定し、事前の確認と調整を徹底する。その姿勢が、現在私を都市土木現場の所長という立場へ導いたのだと思っている。

現在、私の担当現場は、新築ビルと地下街をつなぐ地下接続工事である。供用中の道路や地下構造物、各種埋設物が密集する場所で、リスクを想定しながら工程・安全・品質を守る。協力会社二十～四十名ほどの仲間と、毎日同じ図面を囲み、「今日の最善」を積み重ねている。

そして部下にはこう伝えている。「現場監督は指揮系統上は上位でも、人間として偉いわけではない」と。職人さん、電工さん、鳶さん、大工さん、警備員さん――それぞれの立場で現場を支える人がいて、初めて現場は成り立つ。「職業に貴賤なし」という言葉を、私は現場で何度も教えられてきた。だからこそ、悩みや困難は一人で抱えず、早めに共有してほしい。共有は責任逃れではない。良い構造物をつくるための、最も誠実な手順だ。

いま所長として現場に立つ私は、若い頃の自分に言いたい。「踏ん張るのは一人じゃなくていい」。チームでつくる仕事だからこそ、チームで悩み、チームで決める。その積み重ねが、安全と品質を守り、街の足元を支える。

あの夜、息子に返せなかった言葉を、今ならこう言える気がする。嫌いになったわけじゃない。ただ、守るべきものを一人で抱えようとして、うまくできなかった。建設業の仕事は、最終的に構造物という形を残すが、その完成までには、数えきれない判断と連携が積み重なっている。誰か一人の正解ではなく、チームとして最善を選び続けた結果が、社会に残る仕事になるのだと思う。

だから私は決めた。二度と一人で抱え込まない。現場も、家族も、自分自身も守れるように、必要な人と手をつなぎながら、明日も現場に立つ。

受賞者へインタビュー　私たちの主張

Q1 受賞された感想を教えてください。
Q2 建設業へ入職したきっかけを教えてください。
Q3 現在はどのようなお仕事をされていますか？
Q4 今後の目標を教えてください。



建設キャリアアップシステム 第40回 を活用しよう！

スマホアプリ「建キャリ」対応言語を追加しました！

―言語設定変更方法のご案内―

技能者向けスマホアプリ「建キャリ」は、中国語（簡体字）、フィリピン語、ミャンマー語に新たに対応し、日本語、英語、インドネシア語、ベトナム語を含む計7言語で利用できるようになりました。



言語設定の変更方法



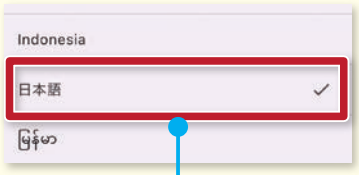
❶ハンバーガーメニューをタップ



❷「アプリ設定」をタップ



❸「使用する言語」をタップ



❹言語を選択



主な多言語対応機能



資格情報



就業履歴



建退共

このほか、CCUS応援団特典情報なども選択した言語でご確認いただけます。
より便利になった「建キャリ」をぜひご活用ください！






フロンティア
FRONTIER
建設の最前線へ！

PROFILE



もりひろ　こうへい
森廣 航平 さん

株式会社 小野組
石川県出身

「現場は人でできている」。安全第一と丁寧な対話で地域に寄り添う、施工管理の要！

新潟県を中心に、地域に根差した事業を展開する株式会社小野組。その最前線で施工計画から安全、環境管理まで、現場管理全般を担うのが森廣航平さんだ。大学では物理・化学系を専攻し、建設業は未経験だった。「最初は建設業という仕事そのものに漠然としたイメージしか持っていませんでした。ただ、私自身はデスクワークよりも屋外で体を動かす仕事を希望して就職活動を進めていた中で当社に出会い、地域への深い愛情や実績に魅力を感じて入社を決めました」。

現場で実務を重ねる中、最も重視するようになったのは“安全”だ。「工程や品質、原価管理も当然重要ですが、安全が確保されてこそ良い施工につながるもの。また、施工計画の段階から環境対策を組み込むことを意識しており、騒音や粉塵などのリスクを事前に洗い出し、早期に取り組みを実施することで、結果的に近隣対応や手戻りの負担を減らし、コストや工期への影響を最小限に抑えています」。

多様な関係者が関わる現場では、日々の対話も欠かせない。「相手の立場を理解し、誠実に対応することを心掛けています。住宅に隣接する現場では、事前に防音壁の設置などを丁寧に説明して回った結果、クレームもなく、近隣の方から手料理の差し入れをいただくほどの良好な関係を築けました」。職人への指示出しも、一方通行にならないよう配慮している。「朝礼やKY活動では、危険ポイントを共有するだけでなく、現場の皆さんからも意見を出してもらうようにしています。誰もが気軽に意見を言え、問題が起きたときに隠さず相談できるチームが良い現場だと考えています」。かつて上司から教わった言葉を、今も大切にしているという森廣さん。「“現場は人でできている”という言葉が印象に残っています。技術や計画が優れていても、最終的には人との信頼関係が現場運営の土台になります」。

様々な現場を経験する中で多くの壁にもぶつかったが、着実にステップアップへとつなげてきた。「複数の工事が同時進行する現場では、多数の事業者との緻密な工程調整に苦労しました。ただ、そうした壁があるからこそ、乗り越えたときの喜びもひとしおです。上司に任され、ほぼ一人で大規模工事の管理を完遂できたときには大きな達成感を得られ、自信にもつながりました。入社当時は目の前の業務をこなすことで精一杯でしたが、今は現場全体を俯瞰し、多くの人と協力しながら現場をまとめることの重要性を理解できるようになりました」と胸を張る。

今後の目標は、管理業務だけでなく実際の作業もできる人材になること。「実作業を自ら経験し理解することで、現場の考えや実情をより深く把握できると考えています」と抱負を語り、建設業に就くことを視野に入れる若者たちにもエールを送る。「施工管理は大変なことも多いですが、自分たちが携わったものが長く地域に残り、人々の生活を支えるという大きなやりがいがあります。最初は分からないことばかりだと思いますが、積極的に現場へ出て、多くの人から学ぶ姿勢を大切にしてください。経験は必ず自分の財産になります！」。

Great Job!（グレートジョブ）



株式会社
小野組
代表取締役社長
小野 貴史 氏

この度、国土交通省による「建設人材育成優良企業表彰」を受賞し、身に余る光栄に存じます。ひとえに日頃からひたむきに業務に励んでくれている社員の皆さん、そして温かく支えてくださるご家族や関係者の皆様の多大なるご支援の賜物です。心より感謝申し上げます。

弊社では、建設産業の核心は「人づくり」「人財育成」であると注力してまいりました。今回の受賞を励みに建設産業の未来を担う人材の育成と、より働きやすい環境づくりに一層邁進し、地域社会への貢献と業界の発展に尽力していく所存でございます。ありがとうございました。

建設人材育成優良企業表彰『優秀賞（総合部門）』を受賞

建設業しんこう
Nov.2026 No.583
令和8年11月10日発行
第51巻 第7号 通巻第583号
■編集・発行
一般財団法人 建設業振興基金
〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-2-12虎ノ門4丁目 MTビル2号館